

2024 年女性用施設増築へ向けた日本カントリークラブの取り組み

東日本大震災を契機に自己変革を開始した日本カントリークラブ



日本カントリークラブでは 2011 年に、年間来場者数の大底を記録していた。

この年は当該クラブにとって悪夢の様な年だった訳だが、これには不可抗力的側面もあり、どうあがいても如何ともしがたかった。この年の 3 月 11 日はいわゆる東日本大震災が発生し、東北地方中心に甚大な被害をもたらした日でもあった。この大災害は、2 万 2,325 名の死者・行方不明者と、日本経済へ計り知れない損失をもたらしたのである。此処から立ち上がろうにも世の中は自粛ムードが蔓延しており、社会的機能は麻痺とは言わないまでもそれに近い状態が長く続いたのである。

喪に服すべしとの社会風潮を多くの国民が是としたのであるから、スポーツと言えども社交を伴うゴルフに対する風当たりが強くなるのは、至極当然の成り行きだったと言える。この動きは全国的であり、ゴルフ場の来場者数が激減したとの話は、当該クラブに限定されたものでは無かった。

とは言え来場者数の減少は、すなわち売り上げの減少でもあり、これを野放図に放置しておくことは命取りになりかねず、当該クラブでは社会が震災前の日常を取り戻しつつある状況下で、集客対策をしっかりと準備して行った。自助努力に加え様々な大手の集客サイトを導入し、営業機会の遺失にならない様、情報チャンネルを増やした結果、来場者が徐々に戻って来たのである。

2012 年 1 年間の来場者数は前年を約 20% 上回り、回復基調を鮮明にした。以降、集客数は徐々に右肩上がりで伸びて行くのだが、中でも顕著だったのは女性の年間来場者数の増加である。従来年間来場者数に占める女性の割合はほんのわずかだが、この構成比率が 2015 年時点では約 8% へ上昇していたのである。また女性会員も 2011 年時点では 50 名ほどにすぎなかったが、徐々に増加していつている。

この様な来場者数の変化には、社会が大震災から復調傾向にあるのみならず、当該クラブの在り方が 2013 年を境に激変した、この点も大きく影響していると言わねばならない。

変わり行くクラブと女性施設の現状

当該クラブは 1970 年 7 月に開場しているがその会員構成は、大手都銀と日本電信電話公社（現 NTT）の関係法人或いは個人が多く、ある意味法人を主体にしたクラブと言えた。例えば会員権の名義書換に

において、個人名義を法人名義へ書き換える事は、入会資格さえ満たしていれば可能だったが、反面法人名義の会員権を個人名義へ書き換える事は、規約上出来得なかった。これは法人名義での入会は歓迎出来るものの、個人会員が増える点についてはクラブの在り方として好ましくない、と言う意思表示でもあった。此の1点を捉えても、当時の当該クラブの在り方が、良く見えて来る。

しかしこの方針が大きく変化したのは2013年であり、コペルニクス的大転換と表現しても過言ではない程の一大転換を、当該クラブは果たしたのである。この変化を入会条件の改定から読み解く事が出来る為、何がどの様になったのか改定前と改定後を対比させ、一目で確認出来る様にしたのが下記である。

改定前

- 1, 年齢 35 歳以上
- 2, JGA 及び KGA 加盟の他クラブへ 1 コース以上在籍しておりオフィシャルハンデ所有者
他クラブ在籍証明書とハンディキャップ証明書の提出要
- 3, 理事 2 名と正会員 1 名の紹介が必要
- 4, 法人名義から個人名義への書き換え不可 / 法人名義から法人名義への書き換え可



改定後

- 1, 年齢 30 歳以上
- 2, 正会員 1 名の紹介要
- 3, 法人名義から個人名義への書き換え可 / 個人名義から法人名義への書き換え可

上記内容からも推測出来る様に、かつては受け入れる会員の対象者をかなり限定していたのだが、入会条件改定後はこの対象者を幅広くした点が一目瞭然で分かる。ある意味、開かれたクラブへの変身、とも言えるのではないだろうか。

更に注目すべきは、改定前と後でも女性に関するクラブへの入会制限は、皆無と言う点である。法人会員を主体としていた時期、女性の来場はごくごく限られており、それは一部会員の妻や子女でゴルフ愛好家と言える人々、更にはその友人や知人の女性では無かったかと思われる。この女性達が利用していた専用施設が今日まで継続使用されていたのだが、当時問題に成り得る様な施設事案はほとんど無かった。別の側面から見れば、問題に成るほどの来場者が無かったのである。

後にも先にも女性会員の受け入れを拒んだ歴史が当該クラブには無いのだが、現時点ではこれが幸いしこの精神が女性来場者の増加につながっている。例えば 2015 年の来場者数は 31,210 人、この内女性は 2,573 人で割合にして約 8%だが、直近の 2023 年は来場者数 39,214 人、内女性は 4,693 人でありその比率は約 12%に達する。

近年のこの傾向を時系列的に見るならば、女性プレーヤーの来場者数が増加している実態をより良く理解出来る。その概略は下記の通りである。

年度	年間総来場者数	年間女性来場者数	構成比	1日平均の女性来場者数
2019年度	38,438人	3,523人	9.2%	9.9人
2020年度	34,701人	3,789人	10.9%	10.7人
2021年度	38,888人	4,492人	11.6%	12.7人
2022年度	40,701人	4,478人	11.0%	12.6人

しかしながら当該クラブハウス内、女性施設の代表とも言えるお風呂場では、洗面、カラン、シャワーの供給数が増築前は1組4名分しか無かった。この受け入れ態勢では、近年の需要を十分に吸収し得ない為、営業利益の遺失となっていた側面も否めず、例えば女性数の多いコンペなどは、必然的に断らざるを得ない状況だった。

今後の需要予測として女性の来場者が増加して行くものと思われる中、如何に受け入れ態勢を充実させて行けるのかは、他クラブ同様に当該クラブに於いても喫緊の課題になっていたと言える。

ところで改装工事前のお風呂場は、下記写真の様な状況だった。



増築工事開始へ至る過程とその下準備

当該クラブ建設計画時、クラブ首脳陣は女性の来場をそれほど意識していなかった、或いはその様な問題意識が希薄だったのだらうと思われる。しかし今日女性ゴルファーの増加を鑑みた場合、この度の増改築は将来のクラブ発展を見据えた必要措置、或いは必要不可欠な設備投資とも言えるし、また別の側面から見れば、50年以上経過したクラブハウス内の経年劣化は如何ともしがたく、来るべくして来た事案だったと言えるのかも知れない。

必要に迫られていた女性用施設の改修に対する社内での検討は、2021年より開始され2022年には親会社の承認を得られた。これが今工事を進めていく上で、大きな支えとなっている。これ以降、2022年5月からは設計を担当する事になったレーモンド設計事務所やその他関係者との打ち合わせなども進み、一見順調に進んでいる様に見える工事推進手続きだったが、思わぬ落とし穴があった。

全ての構築物に関し建築時の建設基準に合った確認済み証を、管轄自治体へ提出する必要があったのだが、ある1ヶ所の確認済み葉書が見当たらなかった。1ヶ所の書類と言えこの問題を解決する為には、専門業者の力を借りて要件を満たす他なかったのであり、再度点検・確認作業を伴う工事は約1年にも及んだ。目途がついたのは翌年の2023年夏頃であり、この空白期間に建設資材が高騰してしまったのは、何とも悩ましく頭を抱えてしまう場面だった。

建築確認済み証の提出と言う難問を解決して以降、2023年10月には会社取締役会にて、また翌11月にはクラブ理事会にて今工事計画の承認を得ることが出来た。此処からは急ピッチで物事が進展したのだが、施工業者については複数社を対象にコンペを開催し、地元の株式会社伊田テクノスを選定した。2024年1月の決定だったが、同月に会社取締役会、そして3月にはクラブ理事会へ報告を済ませ、翌4月から念願の工事へ着手したのである。

振り返れば約3年の月日が経過していた。なお会員へは場内掲示やWebで、毎月の進捗状況などをレポートしている。



女性会員へのヒアリングから得られた提案を設計へ反映

女性の来場者数が徐々に増加していると共に、女性来場者の属性にも変化が見える。女性会員のママ友や仕事をもっている女性会員の友人や知人関係と、社会の広範囲の方が来場する様になった。今工事の主題は女性施設の増改築であるから、当然ながらこの女性の声を聞かなければ、より良い仕上がりに

ならないとの考えから、女性会員から直接話を聞く機会が設けられた。

「懇親会」と命名された女性会員へのヒアリングは、2022年5月14日と2023年10月29日の過去2回開催された。16～17名の方々が参加され、内7名の方は2回全てに参加されている。この「懇親会」は大変有意義なものとなり、利用者で無ければ気づかない点も多く、又女性目線での現実的な指摘と提案は大いに参考になり、その多くが改修計画へ盛り込まれた。

貴重な意見の幾つかを列挙すれば下記のような点になるが、これらは現在使用している施設の不便さとして語られているものの、反面これらを解消出来たならば、機能的で利便性の良い施設になるとも言える。50年前に生まれた現在の女性会員にとって、50年前50歳女性の平均的な体格に適応した施設では、現状不便に感じる点が多くなっていた。

女性会員の声

- ★ 会員用ロッカー数を十分に確保して欲しい。
- ★ ロッカーの幅が狭い。
- ★ 脱衣室にトイレが無いのは不便。
- ★ 洗面台の位置が低く、高くして欲しい。
- ★ シャワーヘッドの位置を高くし、両手を使える様にして欲しい。
- ★ シャワー温度や圧が、使用中に変わらない様にして欲しい。
- ★ パウダーコーナーの鏡に、脱衣棚で着替えている方の姿が映り、お互い気になる。
- ★ 脱衣所に貴重品入れを設置して欲しい。

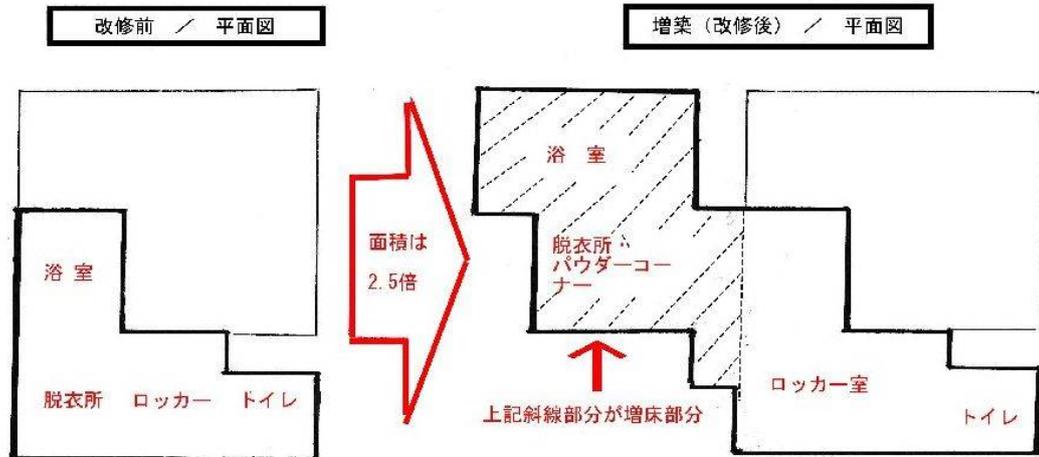
今回の増改築により女性施設はどの様になるのか

それでは今後女性施設は、どの様になるのであろうか？その概要は下記の通りである。

		改修前		増設後	
床面積		92.6 m ² (28 坪)		228.6 m ² (69 坪)	
ロッカー数		43 (会員契約 14、当日分 29)		100 (会員契約 50、当日分 50)	
洗面	(脱衣所)	3	合計 3	4	合計 9
	(パウダーコーナー)	—		5	
浴室	(カラン)	4	合計 6	8	合計 11
	(シャワー)	2		3	

改修前のロッカー総数は43だが、この内会員契約数は14、残り29は当日来場した契約外の女性へ割り当てられる分だ。この当時ロッカーを確保したくとも、出来ない空き待ちの会員が17名いたのである。また改修前の洗面所と浴室規模は、女性4名の1組がホールアウトして来たならば、その4名を受け入れるだけ、その様な許容範囲でしかなかった。例えば女性組数が連続してホールアウトして来たならば、後続組の方には待機して頂く必要があったのである。

上記の改修前と改修後の概要を視認出来る平面図は、下記の通りである。



浴室、脱衣所、ロッカーとして利用していたスペースが、改修後はロッカー室のみの空間となった。

この改修により、どのような効果を得られるのか、その概要を箇条書きにまとめるならば、下記の通りになる。

- ① 女性会員 50 名へ専用ロッカーを提供出来、尚且つ当日の女性来場者 50 名へも提供可能となる。
- ② 改修前の女性会員数は 68 名だったが、改修後 110 名迄拡大出来る余地が生まれた。
- ③ ゲスト女性を 1 日 7 組から、12 組迄受け入れられる。
- ④ 女性プレーヤー 4 名 1 組が、OUT 及び IN から同時にホールアウトして来ても受け入れ可能。

以上により他のゴルフ場施設と比較し、概ね同様の内容になったものと思われ、当該クラブ女性会員がプレーし易い環境を整備出来たと共に、女性ゲストを誘い易い下地を作れたと言える。

当該工事は 2024 年 4 月 18 日 (木) より開始されたのだが、この完成予想映像をレーモンド設計事務所が YouTube を通じ公開しており、会員を含めた多くの関係者が将来像をイメージする事が出来た。念の為、その URL を此処へ記して置く。 < <https://www.youtube.com/watch?v=ZiPe95LxiuE> >

このイメージ映像は、クラブ関係者特に多くの女性会員へ、夢を与え続けて来たものと思われる。

女性用新施設が 12 月 25 日に完成！！

当該クラブでは開かれたクラブへ大きく舵を切って以降、様々な改革を行って来ており、その手は緩むことなく今日に至っている。その改革の象徴的な出来事が、今回の女性施設の増設だったと言える訳だが、この工事は予定通り 2024 年 12 月 25 日に完成した。

この日を迎えるにあたり、すでに女性用お風呂など完成している施設については、部分的に利用を開始していた。新旧施設を巧みに連携させながら、女性来場者に不便を感じさせない様、工夫された移行対策であった。

筆者は 2024 年 11 月下旬、女性来場者が全てクラブハウス内から見えなくなった時点で、クラブ関係者同伴にて施設を見学する機会に恵まれた。かつて旧施設を写したものと、この時に撮影した写真を対比させ、相違点を可視化したのが下記一覧である。

旧



日本カントリークラブ
女性用旧施設

新



日本カントリークラブ
女性用新施設



日本カントリークラブ
女性用旧施設



日本カントリークラブ
女性用新施設



日本カントリークラブ
女性用新施設



日本カントリークラブ
女性用新施設





50年程以上の時が経過している訳なので、見た目でも設備が一新されている事が分かるが、それ以上に機能面で利用者の満足度を高める工夫がされている。来場した多くの女性の方に気持ち良く利用してもらいたい、その様なクラブ側の思いが息づいている。

日本カントリークラブの取り組みを振り返る

女性ゴルファーの来場者増加が、ゴルフ場繁栄の一助になるとの理解が近年深まり、その対策に力を入れるゴルフ場が多くなった。当然ながら当該ゴルフ場に於いても、様々な自社の統計資料を分析する中から、この傾向を把握していた。この対策の為に当該ゴルフ場では、50年以上経過し経年劣化をきたしている、また増加する女性ゴルファーを吸収し得ない従来からの女性施設の改善が、急務であるとの理解に至っていた。

この様な背景から当該クラブでは5年10年先の将来を見据え、この度の設備投資を断行したのであるが、利益を出しては投資して行く、この循環が経営の根幹だとするならば、当該ゴルフ場はまさしくこの軌道への大きな一歩を歩みだした事になる。

変化は時として苦しみを伴うものだが、この変化無くして改革無くまた進歩も無い訳だが、今回の女性施設増設つまり設備投資が、当該ゴルフ場へこの先どの様な効果をもたらしてくれるのか、現時点では推測の域を出ないのだが、恐らく現経営陣を落胆させる数値は、将来に渡って出て来ないのではないだろうか。

改革の手を緩める事の無い、当該ゴルフ場の動向は、今後も注目に値する。

2024年12月27日

文__大野良夫 © Yoshio Oono
日本ゴルフジャーナリスト協会 会員